

〈招待論文〉[研究論文]

トルコ語に見られる敬語及び丁寧表現

Ayşe Nur Tekmen

アンカラ大学¹

Sondan eklemeli bir dil olan ve Altay dili özelliği gösteren Türkçede de Japoncada olduğu gibi “saygı dili (honorifics)” kullanımı bulunmaktadır. Ancak, kibar anlatımlar sadece saygı dili kullanımı ile oluşmamaktadır. Türkçede 2. ve 3. kişi çoğul eklerinin kullanımının yanı sıra “müdürüm”, “hanımım” şeklinde meslek ve mevki adlarına 1. Kişi eki eklenerek dinleyicinin (konu olan kişi de olabilir) yüceltildiği görülmektedir. Diğer yandan, Ol- eylemi, olasılık ve edilgen yapılar gibi oluş bildiren (olaylaştıran) anlatımlar Türkçede anlatımı kibarlaştıran öğeler olarak karşımıza çıkmaktadır. Bu açılardan değerlendirildiğinde Türkçedeki kibar anlatımların “Politeness theory” de yer alan “dinleyicinin isteği” ve “saygınlık (face)” ile açıklanabilen ve açıklanamayan yönlerinin bulunduğu görülmektedir. Bu noktada, öznel kavrayışa (subjective construal) eğilimli bir dil özelliğine sahip olan Türkçe ve Japoncadaki kibarlık algısı ve bunun dile yansıma biçimi ile, nesnel kavrayışa (objective construal) eğilimli bir dildeki algı ve yansımanın farklılık gösterdiği söylenebilir.

Anahtar Sözcükler: Türkçe, Saygı Dili, Kibarlık, Öznelerarasılık (inter subjectivity), Olaylaştırma

キーワード: トルコ語、敬語、丁寧さ、共同主観性、コト化

1. はじめに

普遍的な言語能力のような生物学的普遍性を言語に仮定することも可能である一方、言語を、人間が生み出した最大の文化的要素であり、各社会においてなされた文化的営みの記憶の結晶と見ることもできる。かつてヴント (Wundt 1959) は、人間の生活は共同体をつくり、それを基盤とすることから、個人個人の意識からだけでは説明できない言語や

¹ アイシエヌール・テキメン：トルコ共和国、アンカラ大学、言語・歴史・地理学部、日本語・日本文学科教授

宗教といった精神的所産を生み出すと指摘した。池上嘉彦は、生物学的かつ社会的存在としての人間の言語を、〈認知〉を軸として次のように捉えようと提案する。

… もし言語が人間の 認知の営みにそれ程関わっているとしますと、媒体として働く言語がもともと人間とは全く無関係の（つまり、〈恣意的〉な性格の）ものであるはずはありません。むしろ言語は様々な形で人間の認知の営みに適合するような特徴を備えるものになっているはずで、言語は伝統的な言語学で想定されてきたような（恣意的）(arbitrary) なものでなく、むしろ〈動機付けられて〉(motivated) いるはずなのです。… 言語は伝統的な言語学が考えているように、こうなっているからこうなっているのだということとただ〈記述〉しておけばよいというような存在ではなくて、それと関わる人間の〈認知〉の営みにおける媒体として機能するということによってのその在り方が〈動機付けられて〉おり、したがって〈説明〉できる対象として受けとめられるべきものなのです。(池上・守屋 2012: 11-12)

つまり言語は、人間のもつ基本的な認知能力に基づきながら、それぞれの社会において育まれた文化にも根ざすという意味で、社会ごとに少しずつ異なる認識や事態把握の仕方をその芯に保っていると言えよう。

そうした意味で言語を〈動機付け〉ている要因を探すなら、集団を形成して協同による利益を享受する一方、集団内での関係の認識や維持が生活の重要な側面となったことに端を発する、ボライトネスのコミュニケーションはその最も大きな一例となるはずである。本稿ではこうした観点から、まずトルコ語の基本的な特徴を押さえてから、日本語と同様に敬語を有するトルコ語の敬語及び敬語以外の丁寧表現の仕組みを概観・考察する。

2. トルコ語について

トルコ語はアルタイ諸語の言語とされている古代トルコ語から派生した言語の1つである。古代トルコ語から派生した同系統の他の言語は、アゼルバイジャン語、キルギス語、ウズベク語、サハ語、タタール語、カザフ語、バシキール語、ウイグル語、トルクメン語である(林 2013: 15-16)。これらの言語はテュルク諸語(Turkic Languages)と呼ばれる。テュルク諸語のひとつであるトルコ語はアジア大陸とヨーロッパ大陸の中央部にあり、ヨーロッパ側がテラス、アジア側がアナトリアと呼ばれている地にあるトルコ共和国の言語(公用語)である。

トルコ語の語順はインドヨーロッパ語族と違い、日本語と同様のSOV型である。下記の例ではbenは主語(S)、okulは対象語(O)、gideceğimは述語(V)である。

(1) Ben yarın okul-a gid-eceğ-im. (SOV)

私 明日 学校-与格 行く-未来-一人称

私は明日学校へ行きます。

しかし、(1) の例のような文が使われる場面は限られている。トルコ語には人称接辞という文法要素があり、動作主を強調する場合主語がマーカーとして使われるものである。

(2) Okul-a gid-eceğ-im. (OV)

学校-与格 行く-未来-一人称

学校へ/は行きます (私)。

(2) は主語が文に現れない例だが、自然なトルコ語である。しかし、会話において「明日学校へ行きますか」と聞かれたときに、動作対象を明示すると日本語の「学校は行きます」に近いニュアンスがあり、質問に答えるときはほとんど対象語も略すことが多いのである。すなわち、トルコ語の会話では (3) のように述語だけで文が成り立つ場合も少なくない。

(3) Gid-eceğ-im. (V)

行く-未来-一人称

行きます (私)

英語では go だけだと文が成り立たない。日本語では「私は学校へ行きます」は限られた場合にのみ使われ、「学校へ/は行きます」、「行きます」だけでも文が成り立つという点でも日本語とトルコ語はよく似ていると言うことができる。トルコ語も日本語も、ヨーロッパの言語と違って述語だけで文が成り立つ言語である。但し、下で見るように、動作主の示し方という点では、両言語に看過できない相違点もある。

トルコ語は格や接辞が語の後につく膠着語型の言語であり、この点でも日本語と同様である。

(4) Su-lan-dır-ıl-ma-malı

水-自発接辞-使役-受け身-否定-必然接辞

水で薄めてはいけない (水を加えて、薄めてはいけない)

トルコ語では、単語は語彙単位で文の中を自由に移動する言語である。その場合その後につくすべての接辞がその後と一緒に移動する。これはスクランプリングといわれる現象であり、日本語の特徴でもある。膠着語の特徴と言えるかもしれない。

- (5) Dün sabah okul-a bisiklet-le git-ti-m.
 昨日 学校-与格 自転車-具格 行く-過去-一人称
 (私) 昨日の朝学校へ自転車でいった。
- (6) Okul-a dün sabah bisikletle gittim.
 学校-与格 昨日の朝 自転車-具格 行く-過去-一人称
 (私) 昨日の朝自転車で学校へいった。
- (7) Bisiklet-le dün sabah okula gittim.
 自転車-具格 昨日の朝 学校-与格 行く-過去-一人称
 (私) 自転車で昨日の朝学校へいった。

これら (5) (6) (7) の例を見ると、日本語もトルコ語も単語が文の中を自由に移動することがわかる。語が移動する際には、膠着している助詞や接辞もその語と共に移動する。

トルコ語は上でも述べたように SOV が基本語順だが、文に主語が現れる場合はほとんど限られている。その代わりに、人称を表す接辞が述語動詞に付き動作主を表す。

- (8) Ben bugün Ali'ye telefon et-ti-m.
 私 今日 アリさん-与格 電話 する-過去-一人称
 私は今日アリさんに電話した。
- (9) Bugün Ali'ye telefon ettim.
 今日 アリさん-与格 電話 する-過去-一人称
- (10) *Ben bugün Ali'ye telefon etti.
 私 今日 アリさん-与格 電話 する-過去

(8) (9) (10) の例を見ると、(8) の例は主語も接辞も文に現れているものであり、(9) は主語がないが、人称接辞がある例である。どちらの例ともトルコ語として成り立つが、(8) の場合主語が用いられることによって動作主が強調されており、(9) の場合人称接辞の働きのみによって動作主が示されている。(10) の例は主語があって人称接辞がないが、トルコ語として不自然で不適切である。これら 3 つの例から、トルコ語においては人称接辞が文の必須要素であり、主語はマーカー（区切りや強調の機能）の特徴を持ち、使われる場合と、使われない場合があると言えるだろう。

このような接辞は日本語にないが、金田一（1998: 174-175）が『ユーカラの研究』の中でアラビア語、ハンガリー語、トルコ語やアイヌ語の言語に、それが誰のものを表す接辞があると述べている。アイヌ語では「私の目」は ku-shik', 「あなたの目」は a-shik、ほかの人の目なら shik というように、所有者を区別する接辞を持っている。日本語は、主語を略すという特徴を持つ点ではトルコ語と似ていると言えるが、反面、トルコ語やアイヌ語と違って動作主を表す人称接辞や所有接辞はなく、文脈依存的性格が強いと言える

だろう。

3. トルコ語の敬語

トルコ語については、ヨーロッパの言語と似て、二人称で複数形代名詞の使用が丁寧さを表すということと、三人称でも複数の接辞 (-ler) が使われることによって丁寧な言い方になることである。後で述べることにするが、実はトルコ語にも日本語と同じように、話題の人（同時に聞き手である場合もある）を立てたり、話し手或いは話し手の身内と見られる者の動作を低めて言う敬語の形式がある。

Tekmen (旧 Sugiyama) (2000) はトルコ語の基本敬語動詞を尊敬語、謙譲語、尊敬語・謙譲語、丁寧語の4つに分類している。以下、トルコ語の敬語と思われる体系について考えることにする。

3.1. トルコ語の尊敬語

- (11) Bu gün-kü toplantı-ya Sayın Büyükelçi de **teşrif ed-ecek-ler**.

今日-所有接辞 会議-与格 敬称(様)大使 も いらっしゃる-未来-三人称複数
今日の会議に大使もいらっしゃる。

- (12) *Ben de geçen gün-kü toplantı-ya **teşrif et-tim**.

私 も 先日-所有格 会議-与格 いらっしゃる-未来-一人称
私も先日の会議にいらっしゃった。

(11) も (12) も **teşrif et**-動詞が使われている。**Teşrif** はアラビア語から借用された名詞であって、トルコ語の「する」動詞によって動詞化しているものである。「来ることによってその場の名誉となる」という意味である。動作主が大使である (11) の例では使うことができ、動作主が私である (12) の例では使われないことから、この言葉は日本語の「いらっしゃる」と似たような尊敬語動詞であると言える。

- (13) Bana adınızı **lütfe-der** mi-siniz?

私に お名前-二人称複数-対格 くださる-超時制 疑問詞-二人称
お名前をくださいませんか。

- (14) *Siz-e Ad-ım-ı **lütfe-eceğ-im**.

あなた-与格 名前-一人称-対格 くださる-未来-一人称
あなたに私の名前をくださいます。

(13) と (14) は **lütfe**-動詞が使用されている例である。(11) (12) と同様、**lütfe**- は

(13) のような二人称主語（三人称主語の場合もある）の場合に使われ、(14) のような一人称主語の場合は使われないことから、日本語の尊敬語動詞「くださる」と似た動詞である。実際、lütfet- 動詞は lütfen という形で「ください」とほぼ同じように使用される。

- (15) Az önce Ahmet bey-in de **buyur-duk-lar-ı** gibi ...

先ほど アフメットさん-所有格 も おっしゃる-過去形-三人称複数-所有接辞 ように
先ほどアフメットさんがおっしゃったように ...

- (16) *Az önce düşünce-m-i **buyur-muş-tu-m.**

先ほど 考え-一人称接辞-所有接辞 おっしゃる-muş + -dı 過去形-一人称複数
先ほど考えを（私の）おっしゃいました。

上記の (15) と (16) の例の buyur- はこの場合「言う」という意味だが、(15) の Ahmet Bey の例で第三者の動作に使用され、(16) のような動作主が「私」である例で使用されないことからわかるように、ここでの buyur- は日本語の「おっしゃる」と似た尊敬語動詞と言うべきものである。Buyur-動詞は「言う」以外に尊敬語として「命じる」「人の家を訪問する」という意味にもなる。しかし buyur etmek のように etmek-（する）と一緒に使われるとお客さんを「家の中に入れる」、「ようこそ」という意味にもなるが、この場合は謙譲語に近い意味となる。

一方、トルコ語の buyur- は日本語の尊敬語「なさる」のように、「名詞＋する」から成り立つ動詞の尊敬語動詞としても使用される。日本語の「なさる」は「する」の意味の尊敬語だが、トルコ語の buyur- は「言う／命じる」という動詞の尊敬語である。下の (17) (18) は、「名詞＋buyur-」の形になった尊敬語の例である。

- (17) Ahmet beyin ifade **buyur-duk-lar-ı** gibi toplantı saat

アフメットさん-所有格 表現 おっしゃった-複数-所有接辞 よう 会議 時間
5'te başlayacak.

5に 始まる-未来

アフメットさんが表現なさったように会議は五時に始まる。

- (18) *Ben bu şekilde ifade **buyur-uyor-um.**

私 この ように 表現 おっしゃる-現在-一人称

私はこのように表現なします。

これらの (17) と (18) は、トルコ語の動詞 buyur- が日本語の「なさる」と同様に補助動詞として使用される例だが、(17) のように第三者の行為については使うことができ、(18) のように一人称の場合には使えないことから話題の人（聞き手の場合もある）を立てる尊敬語動詞であることがわかる。

話題の人を立てる役割を果たす、尊敬語的表現のもう一つの例は～maruz である。

Maruz という言葉はもともとアラビア語からの借用語であって、品詞としては形容詞である。

- (19) Sayın Cumhurbaşkanının konuşma-lar-ı **tensiplerine** **maruzdur**.

敬称 大統領-所有格 話-複数-所有接辞 認定-三人称複数-与格 受ける
大統領のスピーチはご判断で決まる。

- (20) *Bugünkü konuşma **tensibime** **maruz**.

今日-所有格 話 認定-一人称-与格 受ける
今日のスピーチは私のご判断で決まる。

Tensip は大体 et- (する) と一緒に使われる単語であり、日本語の「ふさわしく／よろしく思う」という意味になる。上記の例の場合 et- の代わりに maruz と一緒に使われている。Maruz の意味は物・ことの影響を受けること、あるいはその物事の影響の対象であることである。直訳すると「ふさわしい／よろしいを受ける」という意味になるが、上記の二つの文は日本語で言うところの「もしよろしいと決まったら」「よろしいと受け止められたら」という意味になる。(19) の例が適切なのに対し、(20) のような一人称者の意見で決まるといった使い方はできないことから、このような場合 -maruz は尊敬語的な働きをしていると言えるだろう。

また、~maruz は Tensiplerine maruz 以外にも、takdirlerine maruz (...のご判断で決まる)、emirlerine maruz (...のご命令で決まる) などのように主導権のある人物を述べるとき、直接的に「が決める」ではなく受け身的な言い方にして、主導権のある人の動作を明示的に表さないことによって動作主を立てる傾向がある。

Tekmen (2005) では、トルコ語の敬語は動詞だけに見られるものではなく、名詞にもアラビア語で「偉大なる」と言う意味の接辞(もしくは語)「-ali」が付くことを指摘した。

3.2. 謙譲語

トルコ語にも、自分または自分側の人物の行為を低めて間接的にその行為と関係する人を立てる形式もある。

- (21) Siz-e kendi-m-i **takdim ed-ey-im**.

あなた-与格 自分-一人称-対格 紹介する-希望-一人称
あなたに自分をご紹介します(自己紹介させてください)。

- (22) *Ban-a kendi-niz-i **takdim ed-in**.

私-与格 自分-二人称-対格 紹介する-命令丁寧
私に自分をご紹介します。

この (21) (22) の両方において、日本語で「紹介する」と訳せる takdim et- が使われている。

る。動作主が一人称で、行為の対象人物は自分以外（この場合二人称）である（21）は適切で、動作主が二人称であって、行為の対象人物が一人称である（22）は不適切である。したがって、takdim et- は謙譲語的であると言える。

- (23) Rapor-u yarın siz-e **sun-acağ-ı-m.**
 レポート-対格 明日 二人称複数代名詞-与格 差し上げる-未来-一人称
 レポートは明日ご提出します。

- (24) *Raporu yarın bana **sun-acak-lar.**
 レポート-対格 明日 一人称代名詞-与格 差し上げる-未来-三人称
 レポートは明日私にご提出します（彼ら）。

(23) (24) で、sun- は一人称者の「あげる」行為を述べるときに使うのは適切だが、(24) のように他の人がくれる場合に使うのは不適切であり、そこからこの動詞の謙譲語的な機能がわかる。

次は buyur et- の例を見てみよう。

- (25) Kendiler-i-ni içeriye buyur et-tik.
 自分-複数-所有接辞-対格 中-与格 招き入れる-dı 過去-一人称複数
 ご本人を中へ招き入れました。

- (26) Beni içeriye buyur ettiler.
 私-対格 中-与格 招き入れる-dı 過去-一人称複数
 私を中へ招き入れて（くれました）。

(25) は、話題の人への敬意を表す謙譲語的な表現であるが、実は (26) のように自分が人のところへ行って丁寧に家に招き入れてもらったときにも使われる言い方である。Tekmen (2000) では、話題の人物が自分である行為のときにも使う buyur et-（招き入れる）、arzu et-（望む）の二つの動詞の謙譲語用法も、一種の尊敬語用法として扱っている。しかし、(25) (26) の例からすると、buyur et- の表現はもともと謙譲語的な用法があり、行為の対象者が自分である行為について述べるとき、動作主の視点からの構えを取り、その動作主の態度に表れる丁寧さを伝えていると把握した方がわかりやすいのではないと思われる。

3.3. 丁寧語

トルコ語には、です／ますのように常に使われている丁寧語と言えるものはないが、Tekmen (2000) は、bulun-動詞が補助動詞として使用されると丁寧語のように機能すると述べている。Bulunmak は「存在する」という意味の動詞である。

- (27) İstanbul-a gel-di-k.
 イスタンブール-与格 来る-di 過去形-一人称複数
 イスタンブールに来た(私たち)
- (28) İstanbul-a gel-miş bulun-uyor-uz.
 イスタンブール-与格 来る-miş 過去形-存在する-一人称複数
 イスタンブールに来ました(私たち)

(27) は「私たちはイスタンブールに来た」を表すが、(28) の文は、bulun- が補助動詞として使われることによって、動作を表す文から状態を表す文に、すなわち「イスタンブールに着いた状態である」に変わることによって、より丁寧さが感じられる文になる。Bulun- の補助動詞使用は改まった場面でよく使われる表現である。

トルコ語の待遇表現に見られる人間関係も、日本語と同様敬語だけで説明できるわけではない。井出(2006: 108)は日常生活における敬語使用について、話し手が聞き手、場面やその他の様々な要素を瞬時に読み取った上で、瞬間的にその場に適切な言語形式を選ぶと述べている。つまり、これは日本の「空気を読む」文化の言語形式への反映といってもよかろう。実はトルコ語にも日本語の「空気を読む」に近い havayı koklamak (空気を嗅ぐ) という言い方があり、トルコ語も日本語と似ているように様々な要素を瞬時に読み込んだ上でふさわしい言語形式を話者が瞬間的に組み立てる、いうなれば「わきまえ」文化の言語である。敬語は言語コード化したそのわきまえ文化的待遇表現の一部と言えるが、トルコ語には、敬語ではないが、トルコ語において文法的な機能を持ち、さらに場合によって丁寧と把握される言語形式を便宜上丁寧表現²と名付けることにする。

4. トルコ語の丁寧表現

トルコ語の丁寧表現について述べる前に B&L のポライトネス (以下ポライトネス) に触れることにする。敬語は通常はネガティブポライトネスとされる。滝浦(2008: 50-51)は、ポライトネスは敬避的な方向性だけではなく共感的な方向性もあること、敬語=ポライトネスではないことを述べ、敬語の最大の機能は、自分と相手だけではなく、話し手-聞き手-第三者を含む会話の場において、親疎や上下といった人間関係をそのつど表し分けるところにあると主張している。Tekmen(2005)は日本語やトルコ語の敬語を見ると、敬語とポライトネスが、影響するファクター、機能、対象人物などの点で余り接点がないことが分かったと述べ、下記の図でポライトネスの概念と敬語を比較している。

² 丁寧表現は著者が 2002 年にアンカラ大学人文社会系研究科においてはじめて使用した用語である。

	敬語		ポライトネス (B&L)	
種類	話題の敬語	対話の敬語	ポジティブ	ネガティブ
対象人物	話題の人	聞き手	聞き手	聞き手
機能	立てる	豊かな人間関係	親しくなる	距離を置く
ファクター	場面、人間関係、個人的な判断		面子	

また、Tekmen (2012a) は、トルコ語と日本語の丁寧さを主観的な事態把握の観点から取り上げ、両言語における「コト化」をナルの表現及びトルコ語の超時制の観点から分析している。日本語とトルコ語の「コト化」と丁寧さのつながりから、「丁寧さ」という概念と「ポライトネス」という概念は、ものの捉え方が一致するところと異なるところがあることが見える。そのため、本稿では丁寧さ (Kibarlık) を、言い方を和らげる言語的待遇としてとらえている。話し手は必ずしもその場で決まった丁寧な言い方をしなければならないわけではなく、自分の意志でそのような表現を使う。そして話し手と聞き手の間で成り立っている社会的な背景に基づいた親密な回路によってそれが聞き手に伝わる。

4.1. トルコ語の丁寧さと呼称

トルコ語の丁寧さの仕組みは敬語だけでは説明できない。敬語以外に文法要素も丁寧さを与える機能を持つ。その一つとして人称接辞の使用がある。トルコ語では聞き手を二人称複数形で呼ぶと丁寧になる。Abadzig Navaey ve Baksic (2016) はトルコ語とベルシャ語の敬意を払う表現について述べる時、両言語とも二人称を複数代名詞で表現することが一番よくあるパターンだと述べ、しかしトルコ語の場合は、二人称複数なのに代名詞に複数接辞 (-ler) を付けて表現することもあると述べている。

- (29) Sen-i gördüğüme çok mutlu ol-dum.
 二人称代名詞-与格 見ること (会うこと) とても うれしい なる-di 過去-一人称
- (30) Siz-i gördüğüme çok mutlu ol-dum.
 二人称複数代名詞-与格 見ること (会うこと) とても うれしい なる-di 過去-一人称
- (31) Siz-ler-i gördüğüme çok mutlu
 二人称複数代名詞-複数-所有接辞与格 見ること (会うこと) とても うれしい
 ol-dum.
 なる-di 過去-一人称

上の (29) は直接相手を指しているが、(30) は二人称に対して二人称複数代名詞を使うことによって直接相手を指しておらず、(31) の場合も複数代名詞に複数接辞を加えているので相手への指向性がさらに弱くなる。(30) と (31) の複数形の使用は、日本語で人を指すときに、場所を表す指示詞「こちら、そちら、あちら」を用いて指差しのような直

接的な強さを回避することで、表現が丁寧になると類似の原理によるものと見ることもできよう。

上述したようにトルコ語に人称接辞という文法要素があり、主語は対象を特定したり強調するときにマーカーとして使われる。そのため、上記の複数代名詞、複数代名詞 + 複数形が使われる場合は、主語の使用がふさわしくなく、その結果人称接辞だけが複数形になる場合が多い。

- (32) Otur-unuz.

座る-二人称複数

座ってください。

- (33) Siz otur-unuz.

二人称複数 座る-二人称複数接辞

あなた方、座ってください

(33) は、多くの人がいる場合に、その中の 1 人を丁寧に指すのであれば自然だが、1 人しかいないときに用いると違和感が生じる。それで普段は、複数の人称接辞が丁寧さを表すために使われることになり、人を明示的にマークしたいときだけ、主語として複数の代名詞が現れる。

また、モノ (kitap-lar 本-pl., ayakkabı-lar 靴-pl. 等) や第三者 (O-(n)lar 彼ら/彼女ら、Ayşeler アイシェ達) の複数性を表現するために使用される -ler は、主語や話題の人物の所有物及び動作を立てる傾向がある。これは上記のトルコ語の敬語用法に関する文にも当てはまることで、(34) から (37) はその例である。

- (34) Ahmet gel-di.

アフメット 来る-過去

- (35) *Ahmet gel-di-ler.

アフメット 来る-過去-三人称複数

- (36) Ahmet Bey gel-di-ler.

アフメット-敬称 来る-過去-三人称複数

- (37) Ahmet Bey-ler gel-di-ler.

アフメット-敬称-三人称複数 来る-過去-三人称複数

(34) の例は「アフメットさんが来た」ことを言う文である。この文に (35) のように動詞に -ler をつけるだけでは丁寧にならず、ただの不適切な文になる。しかし、(36) (37) のように主語に敬称 (男性の場合 Bey/Beyefendi、女性の場合 Hanım/Hanımfendi; 日本語の「様」の用法に近い) が付く場合は、-ler 三人称複数接辞が主語あるいは主語の動作に付くことによって、それらを立てる役割を果たす場合がある。

- (38) Ahmet beylerin kitapları geldi.

アフメット- 敬称-三人称複数-所有格 本-複数-所有接辞 来る-過去

- (39) *Ahmet bey-in kitapları geldiler.

アフメット- 敬称-所有格 本-複数-所有接辞 来る-過去-三人称複数

話題人物の所有物に複数形がついて話題人物が間接的に立てられることがあるが、この場合、(38) のように主語と所有物だけに複数接辞が付くことになり、(39) のように所有物にも動作にも付けると不適切になる。

金田一 (1987) では、韓国語、中国語、ビルマ語、ジャワ語、ポナペ島の言語、サモア諸島の言語、インドヨーロッパ語族系でもインドの言語などの世界の様々な言語に敬語のあることが述べられている。敬称に関して言えば、英語では、人を呼ぶ場合の敬称 Mr/Miss を自身の呼称に使うことができ、「I am Miss Sara」などと言うことができる。一方、日本語では自分に Miss を付けられない。日本語では職業に「サン・様」をつける場合があるが英語ではそうではないから、例えば、川端の「雪国」で「駅長さん」と呼んでいるところを、英語では“Hello”と訳すか“I say”にするかしかない、と述べている。

(38) (39) の例文で出ているトルコ語の敬称 (男性に Bey, Beyefendi、女性に Hanım, Hanımefendi) は職名にも付けることができ、Müdür Bey, Doktor Hanım のように、職名+Bey/hanım という形が可能である。(さらには、そのまま名前も職名も付けず Hanımefendi Beyefendi と使う場合も普通にある。)「雪国」に出てくる「駅長さん」は、トルコ語への翻訳であれば、英語に訳すほど難しくない。

このように似ているトルコ語と日本語だが、トルコ語の人称接辞の使用によって、日本語と全く違う丁寧さも見られる。それを下記の例で説明する。

- (40) Müdür Bey, günaydın.

校長先生、おはようございます。

- (41) Müdürüm, günaydın.

(私の) 校長先生、おはようございます。

どちらの文も「校長先生」に朝の挨拶をしており、その際に職名を使っている。両方とも丁寧で敬意を払っている文である。(40) と (41) の違いは、(40) では職名に人称接辞がなく敬称の Bey が付いており、一方 (41) では一人称接辞があって敬称がない。(40) のように Bey が職名に付くと、表現が改まった形になる。(41) の場合、職名に一人称接辞を付けることで、話者は聞き手をウチに引き入れ自分をその下に位置付けるかのように見せることができる。仕事上の関係で一緒に働いている人は、このように職名に一人称接辞をつけて相手に敬意を払うことがある。

4.2. トルコ語の共同主観性と丁寧さ

トルコ語も日本語と似たように主観的把握の傾向がある言語である（池上他 2009、Tekmen 2008、Tekmen 2012）。トルコ語は話者が言語化しようとする事態を自己中心的（ego-centric）なやり方で捉える傾向の言語である。すなわち、自分がその話題の関係者であってもなくても、話題の場面に自らの身を置き、イマ・ココの観点で体験的に捉えて事態把握を行う傾向がある。そのようなトルコ語では、特に命令をすることや聞き手にとって望ましくないことを言うときに共同主観的な表現を選ぶ傾向がある。共同主観的な表現は物事の言い方をやわらげ、これが丁寧さにつながる。ここで、共同主観性につながるいくつかのトルコ語の文法要素を取り上げる。

(42) Bu yazıya hemen cevap yaz-alım.

この 書類-与格 すぐ 返事 書く-意志一人称複数

この書類にすぐに返事を書きましょう。

(Tekmen, 2012)

この例ではトルコ語の意思を表す文法接辞の一人称複数形にあたる「-(a)lım」が使われている。この接辞が使われることによって話者が上記の「書く」動作と一緒に行う意思を表現する。日本語の「書きましょう」に似ているとも言える。しかし、このような文を上司が部下に向かって言ったとき、ほとんどの場合部下は「上司と一緒に書く」ことは期待せず「自分が書類を書く」ことを依頼、もしくは命令されたと受け取る。「... 書け」と言ってもいいのに話者が行為と一緒に起こす意思があるかのように「-alım」を使う。この場合は話し手の意志が聞き手に共有されることを期待されているか、目線を相手からそらし、仕事を共有する者同士として「返事を書こう」という意味にも聞こえるので、直接的な命令ではないニュアンスとなり、丁寧さが生じる。このような言い方は、日本語でも、話し手が書くか、聞き手が書くか、一緒に書くかはっきりさせない表現として同じように見受けられる。

(43) Kapı kapan-(ı)yor.

ドア 閉まる-現在形

ドアが閉まります。(駅のアナウンス)

(43) の例は、地下鉄などに乗るとき、地下鉄のドアについて kapıyı kapatıyorum（ドアを閉めます）ではなく、ドアが自動的に閉まるかのように言うもので、アナウンスをしている人が聞き手と一緒にその状況を体験しているかのように言う表現である。上の例の場合、トルコ語の自動詞 kapan-（閉まる）を使うことによって行為を事態化し、実際には話し手がその動作を行っていても、言葉の上ではその事態の中で聞き手と一緒に見ているかのような感覚を作ること、共同主観が成り立つ。このように他動詞より自動詞を選び、動作があたかも自発的に起き、それを話者と聞き手が一緒に経験するかのように表現する

ことが、事態を共感することにつながり、丁寧さを生むと言える。

(44) Maalesef tüm bilet-ler sat-ıl-dı.

残念 すべて チケット-複数 売る-受身-過去

すべてのチケットは売切れてしまいました。

(Tekmen, 2007)

日本語では聞き手が望んでないことを伝える「しまう」が補助動詞として使われる用法がある、これも共同主観性を作る一つの文法形式である。この場合、トルコ語に似たような文法形式はないが、maalesef, ne yazık ki, üzgünüm (残念) のような、共同主観性を作り話し手が聞き手と共感するという事態把握になる言葉がある。(44) はそれにあたる例である。これは相手の視線で物事を把握して言うものである。販売員が客に向かって「すべてのチケットを売った」と言わないで、「すべてのチケットが売れた」とナル的表現を用いて言うのも、話者が動作主を文の上で消し、事態をコト化して表現する傾向の結果である。このような表現の場合、「～しまう」の前に「～なる」・自動詞・受身といった「ナル表現」が来ている。トルコ語では上記の例の場合、動詞が受身形で現れ、maalesef という言葉が「～しまう」の役割を果たす。相手と共同主観的な表現をすることによって、言い方及び事実の伝え方を和らげる。日本語の「なる」と同じように、自動詞、受け身、可能なナル的表現も丁寧さにつながる用法がある。上記の (43) の例での自動詞、(44) で Maalesef と一緒に使われている受け身がその例である。

ポライトネス理論で重視される面子について言えば、上の例（特に後の2つ）では話し手が聞き手の面子に直接考慮していないように見えるが、話し手が聞き手を共同主観的に巻き込むことによって、結果的に聞き手の面子に対する話し手の待遇意識が表現されると言えよう。トルコ語においても日本語と似たように、会話の中の動作を、話し手の動作として表すのか、聞き手の目線に合わせた動作として表現するのか、または話し手と聞き手両者にとって同様の距離感で認識できる動作として表すのか、それぞれの選択によって待遇表現としてのニュアンスは異なってくる。

共同主観的表現としては、会話の中の動作を話し手の動作としてでも、聞き手の目線からとらえた動作としてでもなく、コト化させて表し、共同主観性に基づいて同じ空間内で認識できるようにすることで丁寧さを表すことができる。ここで「コト化」と呼ぶのは、動作としてでも表現できる自分あるいは相手、自分と相手に関係する出来事を事態として表現することによって、行為者をコンテクスト上で消すことを言う。

以下、コト化とトルコ語の丁寧さについて述べる。

4.3. トルコ語におけるコト化と丁寧さ

4.3.1. トルコ語の Ol- と丁寧さ

日本語におけるコト化の一例として、「ナル」が使われている表現があげられる。池上

(1999) は自発について、「物事が『自ら然る』ように表現しようとする傾向、動作主の動きを消去する」と述べている。トルコ語にも日本語の「ナル」のように変化・出来事を表す「ol-」という動詞がある。下記の(45)はその例にあたる。

(45) Ağabey-im akademisyen ol-du.

兄-一人称 学者 なる-di 過去

兄が学者になりました。

トルコ語のなる動詞の日本語のなる動詞と一番異なっているところはトルコ語のなる動詞が「存在」を表すときにも使われることである。それは次の例にあたる。

(46) Yarın okul-da ol-acak-mı-sın?

明日 学校-場所格 なる-未来-疑問-二人称

明日学校にいますか。

(46) の Ol- は、日本語では「なる」動詞に訳せない。この場合、トルコ語のナルは「存在」を表すものである。実はトルコ語の「存在する」という動詞も「ある」にあたる var と「なる」にあたる ol- から成り立つ varol- (存在になる) というものである。(46) の例からするとトルコ語の「なる」動詞、ol- は出来事から存在まで幅広い意味合いを持つものである (Tekmen 2008, 2012a, 2012b, 池上他 2010)。このように幅広い意味を用いる動詞が、コト化する特徴もあって、トルコ語の丁寧さと深く関係を持つものである。

(47) Kendisi okuldan arkadaşım ol-ur.

自分-所有接辞 学校-奪格 友達-与格 なる-超越形

彼は学校の友達です。

(Tekmen 2012)

(47) の例の ol- は、「なる」を変化の意味で解釈するとおかしい日本語訳になってしまうが、トルコ語の感覚では自然である。(47) の例は「Kendisi benim arkadaşım (彼は私の友達 (だ))」だけでも成り立つのに「ol-」が使われることによって状況をコト化し、聞き手と話し手がその状況を二人で見ている空間を作り出している表現として説明できる。このことによって、話者が外からの目線で相手に友達を指して言うのではなくて、コト化によって言い方がやわらかくなる。「私の友達」であることを「ol-」によって自分から一旦離し、聞き手と同じ距離で一緒になって見ているような把握、つまり主観の共有が成り立っている。

4.3.2. トルコ語の受け身と丁寧さ

(48) Okul-da toplantı düzenle-n-ecek.

学校-処格 会議 開催-受身-未来

学校で会議が開かれます。

(48) の例は、話し手が主催者側の一員であっても使われる表現である。この場合、受身が使われることによって、話し手が自分がイベントの主催者であっても、「会議を開く」という動作を受け身によってコト化させて述べることとなり、動作主の「私」を文の上で消して焦点が当たらないようにしている。それによって言い方が和らくなり、これが丁寧さに繋がる。

(49) Adaya gidil-di.

島-与格 いく-受身-過去形

島へ行きました。

この例も (48) と似ているが、日本語でこの文をそのまま言おうとすると、「行かれた」という受身形であることから迷惑の受身のような表現になってしまう。しかし、トルコ語の受身は感情を表す機能を持たないので、ここでは感情ではなく、(48) の例と同じように話者が行為をした一人であっても、受身を使うことによって動作の感覚がなくなり、文がコト化し、行為であるはずのものが生起した事態として見える。この場合も、上の例と同じように、聞き手とその事態を同じ距離感で一緒に見ている感覚が直接的な言い方を避け、表現を和らげていると思われる。そして、それが丁寧さにつながる。特にビジネス世界でこのような表現が好まれて使われる。

4.3.3. トルコ語の超時制と丁寧さ

トルコ語には超時制（超越形）という文法形式があり、習慣などいつもしていることを言うときに使われる。しかし、時間を拡大して、特定の時間を示さないのが、文から時間の感覚を消すことでコト化が起き、それが丁寧さにつながる。

(50) Oku-r mu-sunuz?

読む-超越形 疑問-二人称複数

読んでいただけますか。

(51) Okuy-abil-ir mi-siniz?

読む-可能-超越形 疑問-二人称複数

読んでいただけますか。

これらのトルコ語の文は日本語に直訳できない。日本語に訳すときは、どちらの文にもトルコ語にない「いただく」のような授受動詞の補助動詞を使いたくなる。人に何かを依頼するとき、超時制の代わりに okuyor musunuz? のように現在形、あるいは Okuyacak mısınız? のように未来形を使って表現すると、使用時制によって時間が限られてしまうことで、「読んでもらいたい」という依頼が高圧的に響く。言い換えると、超時制は、時

間の感覚を消すことによってイマ・ココの感覚をなくし、それが表現の事態化につながる。また、(50)の例は超時制だけが使用されているが、(51)の例ではナル的表現の可能形が超時制と組み合わせられている。ナル的表現でやわらげた言い方は、超時制の使用によってイマ・ココの感覚が消され、(50)より丁寧な言い方と認識される。

(52) Hayvan kabul ed-il-ir.

動物 受け入れ する-受身+超越形

動物を受け入れております。

(52)の例でも超時制が使用され、超時制と一緒にナル的表現である受け身が使用されている。超時制で時間の感覚が消され、その上受け身形が使われることによって動作主が消されることによって、この表現は丁寧さにつながる。日本語の場合、敬語（丁重語）の補助動詞用法「おる」が使われることによって丁寧さが表されるが、コト化による丁寧さとは異なる。

超時制の使用が丁寧さにつながるもう一つの場面は、何かを禁じる場面である。特に学校、駅などの公的な場面において、不特定多数に対してアナウンスするときには、「吸い殻を捨てるな」あるいは「車の駐車は禁止」に相当するような言い方をすると、禁じる行為がそのまま伝わってストレートすぎるため、人間関係においていろいろな問題を招きかねない。しかし、超時制が使われると時間の感覚がなくなり、受け身表現によって共同主観性が成り立ち、禁じられていることを話し手と聞き手が一緒に見ているかのような言い方になる。共同主観性が成り立ち、行為がコト化することによって言い方が和らげられ、話し手が「禁じる」のを、行為ではなくコトとして受け入れ、これが丁寧さにつながる。下はその例である。

(53) Park ed-il-mez!

駐車 する-受身+否定・超越形

駐車はされません（駐車禁止）

(53)はトルコ語の禁止の例であるが、この場合も「受身+否定・超越形」になる。「受身」は動作主を文から消し、その行為を事態化する。その上に超時制の否定形が使われることによって、時間の感覚が消されるが、否定文であることで禁止の意味内容は伝わる。人に直接だめと言わず、聞き手が面子を潰されないことになるので、これが丁寧さにつながる。

6. 結び

以上、トルコ語の敬語及び丁寧表現について見てきた。トルコ語も日本語の敬語用法に

似た敬語形式を持つ言語である。しかし、トルコ語の待遇表現における表敬や丁寧さは敬語に限られるものではない。トルコ語では人称の複数形は丁寧さに繋がるが、それは主語だけではなく、ほとんど複数の人称接辞が所有物あるいは動作所有者に付く人称接辞である場合が多い。トルコ語でも、人を役職名、敬称で呼ぶことがある。動作主が現れる行為に焦点を当てた言い方を「ナル表現」で表現することによってコト化させ、共同主観性に基づいて事態を共有することにより、行為をめぐる対立を避ける。つまり、トルコ語話者にとって、コト化は受け入れるべきものであって、対立しないものであるがゆえに、こうした表現が何らかの形で言い方を和らげる機能を持ち、従来の「丁寧さ」とは若干異なる意味での「丁寧さ」につながられるのだと考えられる。

トルコ語における事態化は、ナル表現以外に時制においても見られるものである。トルコ語の超時制や超越形と呼ばれる時制は、特定の時間を指定せず、拡張する機能を持つため、時間の感覚が失われ、事態化につながる。トルコ語で「超時制」や「可能・超時制」が使われるところで日本語では「いただく・可能」が使われるが、この場合、実際に利益が話し手にあるか否かより、可能形を使うことによって事態をコト化し、聞き手と共同の空間で眺め、「いただく」を使うことによって喜びを分け合うかのような表現がされる。

トルコ語では超時制を使うことによって時間の感覚を消し、ナル表現である「可能」を使うことによって聞き手の共同空間で事態が起きることを眺め、さらに可能形とともに人称接辞も使われるので利益者も表現される。話者からの一方的な言語行動の場合、トルコ語では「受身・超時制」が使われ、時制の感覚が消され、受け身によって動作主が文に現れずに、話者が聞き手と同じ空間をシェアしているように把握され、これが丁寧さにつながる。

トルコ語を見ると、待遇表現に関しても日本語と非常に似ている点があることがわかる。上記見てきた例からすると、トルコ語の丁寧さは相手の意思、面子などで説明できる部分と説明できない部分がある。トルコ語や日本語のように主観的な把握の傾向があつて、膠着性を持つ言語における丁寧さの概念と、言語におけるそれらの現れ方は、客観的な把握の傾向がある言語とは異なる。これからの課題として、事態把握において類似している言語の比較をより積極的に行い、文化の言語コードの現れ方を解明してゆく必要がある。

参考文献

- Brown, P. and S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- 林徹. 2013. 『トルコ語文法ハンドブック』東京：白水社.
- 井出祥子. 2006. 『わきまへの語用論』東京：大修館書店.
- 池上嘉彦. 1981. 『〈する〉と〈なる〉の言語学』東京：大修館書店.

- 池上嘉彦. 2000. 『「日本語論」への招待』東京：講談社.
- 池上嘉彦. 2006. 「〈主観的把握〉とは何か」、『言語』5月号、pp. 20-27、大修館書店.
- 池上嘉彦. 2007. 『日本語と日本語論』東京：筑摩書房.
- 池上嘉彦・徐一平・テキメン, アイシェヌール・守屋三千代. 2008. 「認知言語学と日本語教育」、ワークショップ予稿集 *The Eighth International Symposium on Japanese Studies and Japanese Language Education*. The University of Hong Kong.
- 池上嘉彦・守屋三千代 編. 2012/2009. 『自然な日本語を考えるために』(2刷)、東京：ひつじ書房.
- 池上嘉彦・守屋三千代・テキメン, アイシェヌール. 2010. 「『なる表現』再考—膠着語における事態の〈主観的把握〉の観点から」、『認知言語学論集』10、366-376.
- 金谷武洋. 2002. 『日本語に主語はいらない』東京：講談社.
- 金谷武洋. 2003. 『日本語文法の謎を解く』ちくま新書、東京：筑摩書房.
- 金田一京助. 1956. 『日本の敬語』東京：角川書店.
- 金田一晴彦. 1971. 『日本語(上)』(23刷) 岩波新書、東京：岩波書店.
- 金田一晴彦. 1987. 『日本語の特質』新 NHK 市民大学叢書、東京：NHK 出版.
- 金田一晴彦. 1998. 『日本語(下)』(26刷) 岩波新書、東京：岩波書店.
- Logie Nur Nacar. 2006. A Contrastive Study of Linguistic Representation of Impoliteness in French and Turkish. *Hasan Ali Yücel Eğitim Fakültesi Dergisi*, 153-173.
- 守屋三千代. 2009. 「小説の冒頭に見られる『語り』と『読み』」、『日本語日本文学』19、創価大学.
- Navaey Abadzic Azra, and Sabrina Baksic. 2018. Türkçe ve Farsçada Nezaket Stratejileri: İltifatlar, İyi Dilekler ve Saygı Gösterme, *Turkish Studies*, 1-16.
- 鈴木孝雄. 2015. 『日本語教のすすめ』(6刷) 新潮新書、東京：新潮社.
- 滝浦真人. 2008. 『ポライトネス入門』東京：研究社.
- Tekmen, A. (旧・杉山アイシェヌール). 2000. 「トルコ語の敬語動詞についての基礎研究」、『東京大学論集』19、227-246.
- Tekmen, A. 2005. Türkçe ve Japoncada 'Saygı Dili' Kavramı Üzerine. *V. Uluslararası Türk Dili Kurultayı Bildirileri 2*, 2827-2836. TDK.
- Tekmen, A. 2007. 「待遇表現の分類再考察」、『ヨーロッパ日本語教育 (Japanese Language Education in Europe)』11, 125-133.
- テキメン・アイシェヌール. 2009. 「日本語とトルコ語の待遇表現の実態」「アジア圏の社会言語学アジアの視座が切り拓く待遇言語行動研究の展望」『社会言語科学会十周年記念シンポジウム予稿集』社会言語科学会.
- Tekmen, A. 2012a. 「トルコ語と日本語—主観的な把握と丁寧さ」『チュルク諸語研究のスコープ』pp. 41-60、広島：溪水社.
- Tekmen, A. 2012b. Bilişsel Yaklaşımla Türkçe ve Japonca'nın Karşılaştırılması. *Türkiye'de Japonya çalışmaları I*, Boğaziçi Üniversitesi Yayınları, 61-75.